

第二次審査（論文公開審査）結果の要旨

A survey of surgically resected pituitary incidentalomas and a comparison of the clinical features and surgical outcomes of non-functioning pituitary adenomas discovered incidentally versus symptomatically

手術適応となった下垂体偶発腫瘍の内訳と
症候性腫瘍と比較した際の臨床像と手術アウトカム

日本医科大学大学院医学研究科 内分泌代謝・腎臓内科学分野

研究生 大野 万葉

Endocrine Journal 68, 2021 掲載

DOI: 10.1507/endocrj.EJ20-0335

近年の CT/MRI の普及によって、下垂体腫瘍はより発見されやすくなり、その頻度は年間 10 万件あたり 1-6 件にのぼる。下垂体腫瘍は、画像検査で偶然発見される偶発腫瘍と、腫瘍による臨床症状により発見される症候性腫瘍の 2 つに大別される。偶発腫瘍と症候性腫瘍の臨床像や手術のアウトカムを直接比較した研究は少なく、偶発腫瘍の取り扱いも定められていない。

そこで本論文において申請者は、偶発腫瘍と症候性腫瘍の臨床像や手術アウトカムを比較検討した。

偶発腫瘍は、症候性腫瘍と比較して、高齢で発見された ($p<0.05$)。また、偶発腫瘍は症候性腫瘍に比べて、腫瘍径が有意に小さく ($p<0.01$)、術前の下垂体前葉ホルモン分泌低下の合併が少なく (GH 低下, $p<0.01$; Gonadotropin 低下, $p<0.01$; ACTH 低下, $p<0.01$)、術後の下垂体機能も保たれていた ($p<0.01$)。一方で、下垂体機能低下の新規出現率 ($p=0.57$) と改善率 ($p=0.66$) に有意な差はなかった。術後の重症下垂体機能低下症に関連する因子は、男性 (OR 4.152, $p<0.05$)、腫瘍径 (OR 1.077, $p<0.05$)、症候性腫瘍 (OR 5.037, $p<0.01$) であった。その他の術後合併症については、両群間で有意な差はなかった。

第二次審査では、偶発腫瘍の特徴（性差、腫瘍径、死亡解剖時に偶然に発見される確率など）、偶発腫瘍が最終的に手術適応になった確率、下垂体腫瘍の腫瘍径による手術適応の目安、下垂体腫瘍の疫学調査の結果などに関して質疑がなされ、それぞれに対する的確な回答が得られ、本研究に関する知識を十分に有していることが示された。

本研究は、下垂体腫瘍における偶発腫瘍と症候性腫瘍の臨床像および手術アウトカムを明らかにするとともに、申請者が自立した研究者としての資質を備えていることを示している。以上より、本論文は学位論文として価値あるものと認定した。